

学生アンケートの結果からみる宮崎大学の学部生の傾向

－ポリシーの周知度と身につけた資質・能力の相関－

田中 秀典・武方 壮一

(宮崎大学 IR 推進センター) (宮崎大学教育・学生支援センター)

はじめに

平成 28 年 3 月 31 日に文部科学省は、学校教育法施行規則の一部（第 165 条の 2、第 172 条の 2）を改正する省令を定め、ディプロマ・ポリシー（DP：卒業の認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（CP：教育課程の編成・実施の方針）、アドミッション・ポリシー（AP：入学者受入れの方針）の、いわゆる 3 ポリシーを一貫性のあるものとして策定し、公表することを平成 29 年 4 月 1 日より義務づけた¹⁾。これにより、大学は平成 29 年度より 3 ポリシーに則った教育を実施し、自ら教育の効果を検証し、公表するという教育の内部質保証の実現に取り組むことになった。この内部質保証とは、PDCA サイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習・その他サービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセスを指している。

同時に大学は 7 年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関（認証評価機関）の実施する外部評価を受けることが義務付けられており²⁾、これにより教育の内部質保証が機能しているかについて評価を受ける。この大学を認証評価する機関には、公益財団法人大学基準協会（平成 16 年 8 月 31 日文部科学省認証）、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（平成 17 年 1 月 14 日同認証）、公益財団法人日本高等教育評価機構（平成 17 年 7 月 12 日同認証）の 3 つがある³⁾。

大学改革支援・学位授与機構が出している「教育の内部質保証に関するガイドライン」によると、教育の内部質保証を実現するための学内の仕組みとして、6 項目が提示されている。その中に、「教育プログラムの点検・評価」があげられており、プログラム単位での学習成果等に関係する各種の定量的データの把握と授業評価等の調査による「モニタリング」と、これらのデータに基づくプログラムの質の総合的な点検・評価による「レビュー」を行うことが例示されている。また、「教育の内部質保証に関する方針と体制」を構

築する上で、学生や外部のステークホルダーの意見を反映できる体制を有することも期待されている。その具体的な手法として、点検・評価への学生代表の参加、学生と教員との意見交換の場の形成、学生との協働による FD の実施や、学生や学外者へのアンケート調査や意見聴取などが示されている。

宮崎大学では、平成 18 年度から学習の成果を点検するために、入学時、2 年次、最終年次に学生アンケートを実施してきている。このアンケートでは、3 ポリシーの周知度、学習時間、身につけた資質・能力について質問し、集計結果は大学機関別認証評価の根拠資料として活用している。そこで本稿は、AP、DP の周知度が GPA 及び学生が身につけた資質・能力と相関が見られるかについて、これまでのアンケートから取得された情報を Institutional Research (IR)⁴⁾ の観点で分析することにより検証を試みる。

1. 調査方法

学生へのアンケート調査により、3 ポリシーに則った教育の効果を検証するために、教育・学生支援センターが行った、平成 26 年度に入学した学部学生の初年次、2 年次、最終年次を対象とするアンケート（学生調査）の結果と GPA の関連性を分析した。すなわち、平成 26 年度アンケート（初年次）、平成 27 年度アンケート（2 年次）、平成 29 年度アンケート（最終年次：学士課程）を使用した。ただし、標準修業年限が 6 年の医学部医学科及び農学部獣医学科は除外した。また、途中で留年・休学・停学・退学・除籍・転籍した学生も除外し、4 年で卒業した学生のみを解析の対象としている。GPA データも含め、全てのデータは、個人が特定できない状態に処理したものを結合して分析を行った。これらのデータは、Tableau Desktop 10.5.9 (Tableau Software Inc.)、PowerBI (Microsoft)、R 3.5.1 (R Foundation for Statistical Computing) を用いて分析した。なお、有意差検定は Tukey-Kramer 検定にて行った。

2. 初年次調査で AP を読んだことがある／ないと回答したグループ

まず、入学時の調査で「現在在籍している学科・課程の入学受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を読んだことがありますか。」という問いに対して、「読んだことがある」と「読んだことがない」と回答したグループに分けた（表 1）。回答した看護学科の回答した学生は全員 AP を確認したことがある一方、農学部は約 65% の学生が読んだことがあると回答した。この読んだことがあるグループの 1 年前期の GPA の平均は (2.68)、読んだことがないグループのそれより (2.54) 統計的に有意に高いことが示された ($p < 0.01$)。しかし、その差は学年が進行するにつれて有意でなくなる傾向が見られた。また、入試区別に分析を行った結果、推薦入試を経て入学した学生の 9 割以上は AP を読んだことがある一方、前期は 7 割、後期は 6 割程度と低下する傾向が見られた（図 1）。

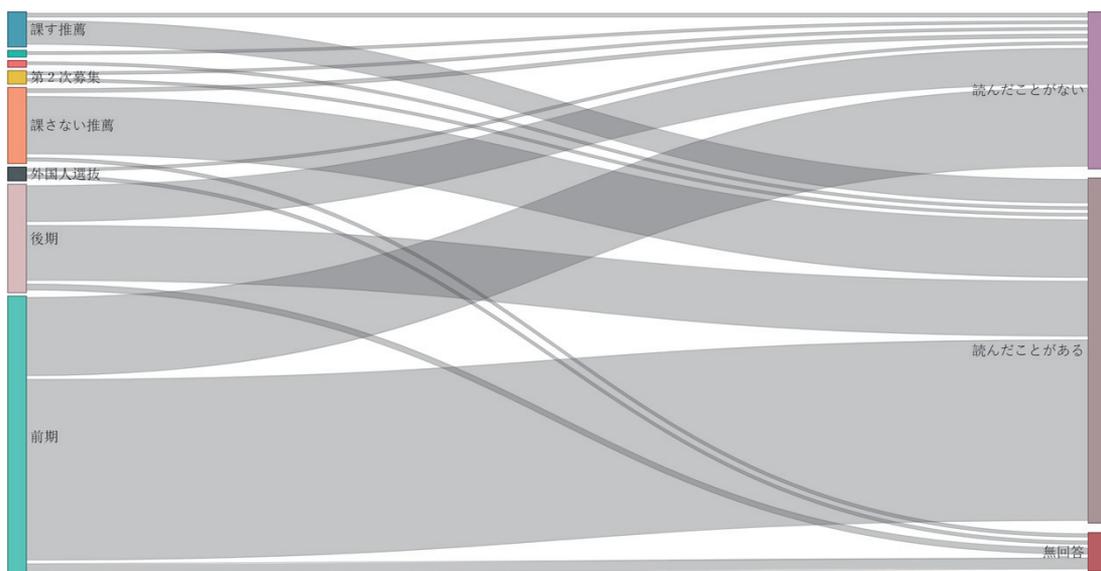
次に、この各グループにおける、その他の質問項目

に対する回答の中で、特徴的であったものを表 2 に示した。高校の所在地別でみると、読んだことがあるグループの 41.5% は宮崎県の高校である一方、読んだことがないグループの半数近くは宮崎県以外の九州であった。この AP を読んだことがないグループは、どのような知識を修得することを目的とした学科・課程であるかの理解や、職業上・学問上の関心ではない消極的な理由による大学進学決定、入学難易度や受験科目による学科・課程の選択を行っている傾向がみられた。また、宮崎大学を選んだ理由として、読んだことがあるグループは校風を重視した回答が約半数であったが、読んだことがないグループは重視しない回答が約半数を占めた。教育の充実により選んだ学生は、読んだことがあるグループの方が重視している割合が高かった。大学からの入学前のアプローチ（オープンキャンパス、出前講義）では、参加・体験している割合が少ないものの、その中でも読んだことがあるグループは、比較的重要であったと回答する傾向が強く見られた。

表 1 初年次調査でアドミッション・ポリシーを読んだことがあるグループと読んだことがないグループ

	教育文化学部	工学部	農学部*1	医学部*2
読んだことがある	135 (72.6%)	171 (82.2%)	236 (65.7%)	27 (100%)
読んだことがない	51 (27.4%)	37 (17.8%)	123 (34.3%)	0 (0%)

*1 獣医学科を除く *2 医学科を除く 無回答もあるため、合計は 100%にならない場合がある。



左側は入試区分、右側はアドミッション・ポリシーを読んだことがある／ないグループを示す。

図 1 入試区別にみたアドミッション・ポリシーを読んだことがあるグループと読んだことがないグループ

表 2 初年次調査でアドミッション・ポリシーを読んだことがあるグループと読んだことがないグループにおける各設問に対する回答

設問	出身高校の所在地はどこですか		
	宮崎県	宮崎県以外の九州	九州以外
読んだことがある	236 (41.5%)	227 (39.9%)	103 (18.1%)
読んだことがない	62 (29.4%)	99 (46.9%)	50 (23.7%)

設問	あなたが所属する学科・課程では4年間もしくは6年間でどのような知識を修得することを目的としているのか知っていますか			
	よく知っている	だいたい知っている	はっきりとは知らない	まったく知らない
読んだことがある	44 (7.7%)	419 (73.6%)	96 (16.9%)	1 (0.2%)
読んだことがない	12 (5.7%)	127 (60.2%)	65 (30.8%)	4 (2.0%)

設問	大学に進学しようと決めた第1の理由						
	職業上の関心から	学問上の関心から	経済上の関心から	両親に勧められて	学校の先生に勧められて	両親や学校の先生以外の人に勧められて	よくわからない
読んだことがある	238 (42.0%)	202 (35.6%)	50 (8.8%)	15 (2.6%)	26 (4.9%)	5 (0.9%)	17 (2.3%)
読んだことがない	88 (41.7%)	56 (26.5%)	28 (13.3%)	10 (4.7%)	11 (5.2%)	2 (1.0%)	12 (5.7%)

設問	現在の学科・課程を選んだ第1の理由						
	学科・課程の専門分野	宮崎大学の学科・課程だから	社会における学科・課程の評価	学科・課程の教育内容が文科系か理科系か	学科・課程の入学難易度	受験科目	卒業後の進路
読んだことがある	200 (35.2%)	19 (3.3%)	2 (0.4%)	32 (5.6%)	32 (5.6%)	73 (12.8%)	189 (33.2%)
読んだことがない	44 (20.9%)	6 (2.8%)	4 (1.9%)	11 (5.2%)	27 (12.8%)	45 (21.3%)	61 (28.9%)

設問	受験準備の段階で、あなたが入学を希望していた学科・課程は次のうちどれですか					
	現在在籍している学科・課程	宮崎大学の他の学科・課程	他大学の同じ分野の学科・課程	他大学の異なる分野の学科・課程	入学を希望していた学科・課程は特になかった	入学を希望していた学科・課程はとくになく、入試直前まで大学進学も考えてなかった
読んだことがある	257 (45.2%)	46 (8.1%)	158 (27.8%)	102 (17.9%)	5 (0.9%)	0 (0%)
読んだことがない	54 (25.6%)	18 (8.5%)	78 (37.0%)	54 (25.6%)	3 (1.4%)	2 (1.0%)

設問	受験準備の段階で、現在在籍している学科・課程は第何志望でしたか			
	第1志望	第2志望	第3志望	第4志望以下
読んだことがある	261 (45.9%)	130 (22.9%)	72 (12.7%)	99 (17.4%)
読んだことがない	52 (24.6%)	51 (24.2%)	45 (21.3%)	57 (27.0%)

設問	宮崎大学での充実した学生生活について期待していますか			
	たいへん期待している	まあまあ期待している	あまり期待していない	まったく期待していない
読んだことがある	256 (45.0%)	281 (49.4%)	22 (3.9%)	4 (0.7%)
読んだことがない	68 (32.2%)	119 (56.4%)	21 (10.0%)	2 (1.0%)

設問	宮崎大学を選んだ理由として校風は重要でしたか			
	たいへん重要だった	まあまあ重要だった	あまり重要でなかった	まったく重要でなかった
読んだことがある	62 (10.9%)	246 (43.2%)	206 (36.2%)	49 (8.6%)
読んだことがない	21 (10.0%)	59 (28.0%)	78 (37.0%)	52 (24.6%)

設問	宮崎大学を選んだ理由として教育の充実は重要でしたか			
	たいへん重要だった	まあまあ重要だった	あまり重要でなかった	まったく重要でなかった
読んだことがある	175 (30.8%)	315 (55.4%)	56 (9.8%)	14 (2.5%)
読んだことがない	42 (19.9%)	96 (45.5%)	44 (20.9%)	28 (13.3%)

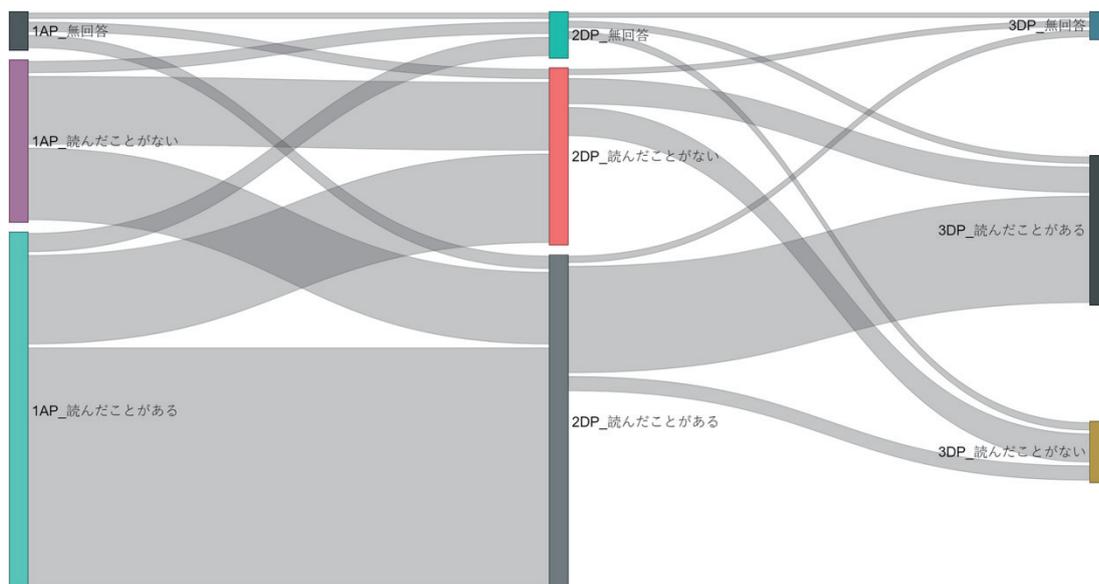
設問	宮崎大学を選んだ理由としてオープンキャンパスに参加したことは重要でしたか				
	たいへん重要だった	まあまあ重要だった	あまり重要でなかった	まったく重要でなかった	参加してない
読んだことがある	67 (11.8%)	93 (16.3%)	46 (8.1%)	12 (2.1%)	345 (60.6%)
読んだことがない	7 (3.3%)	13 (6.2%)	13 (6.2%)	5 (2.4%)	170 (80.6%)

設問	宮崎大学を選んだ理由としてオープンキャンパス以外の出前講義等で授業を体験したことは重要でしたか				
	たいへん重要だった	まあまあ重要だった	あまり重要でなかった	まったく重要でなかった	体験してない
読んだことがある	36 (6.3%)	73 (12.8%)	36 (6.3%)	16 (2.8%)	398 (70.0%)
読んだことがない	8 (3.8%)	12 (5.7%)	14 (6.6%)	4 (1.9%)	172 (81.5%)

一部設問については、表形式にするために文意を変えない程度に文章を修正している。無回答もあるため、合計は100%にならない場合がある。

さらに、これらのグループの2年次及び最終年次の調査におけるDPを読んだことがある／ないに関する設問については、図2に示すような傾向が見られた。すなわち、新入時にAPを読んだことがある学生は、

DPも読んでいる。ただし、学年進行につれて回答率が極端に低下するため明確に結論づけることは難しいかもしれないが、APとDPを読むことに関しては一定の相関があると考えられる。



左側は初年次のアドミッション・ポリシー、中段は2年次のディプロマ・ポリシー、右側は最終年次のディプロマ・ポリシーを示す。

図2 アドミッション・ポリシーを読んだことがある／ないグループとディプロマ・ポリシーを読んだことがある／ないの関係

3. アンケート結果と GPA の関係

アンケートの結果と GPA の関係について分析した。初年次に、高校時のクラブ活動に関する設問があり、所属していた場合は文科系または運動系を選択させるが、文化系クラブに所属していた学生 (n=173) の方が、運動系クラブに所属していた学生 (n=392) よりも 1 年前期の GPA は 1% 水準で有意に高かった (2.80 ± 0.56 及び 2.60 ± 0.58)。通算 GPA においても、同様の傾向であった (2.59 ± 0.55 及び 2.43 ± 0.53)。また、受験準備の段階で、現在在籍している学科・課程は第何志望であったかを質問しているが、これも 1% 水準で有意に差が確認された (表 3)。ここでは、第 4 志望であった学生の成績が高く、第 1 志望の学生が低い結果であった。2 年次及び最終年次のアンケートには、学習時間や環境、職業観などに関する設問が加わるが、これらと GPA の間に明確な差は見られなかった。しかしながら、人間関係や健康面に関する設問に対しては、若干の差が見られた (表 4)。

4. DP と身につけた資質・能力との関係

2 年次と最終年次のアンケートでは、基礎教育において身につけた資質・能力に関する設問がある。そこで、2 年次の調査における資質・能力に関する設問と、DP を読んだことがある／ないの関係性について分析した。その結果、全ての資質・能力において、DP を読んだことがある学生の方が身についたと回答 (「そう思う」と「ある程度そう思う」) している割合が高かった。特に、外国語によるコミュニケーション能力、自然や社会と係わりながら現場から学ぶ態度、文章読解力においては、大きく割合が異なっていた (各 13.8 ポイント, 12.1 ポイント, 27.5 ポイント差)。一方、レポートや文章を書く力や聞く力や相手の考えを理解する力などにおいては、あまり差は見られなかった。なお、DP を読んだことがあるグループとないグループにおいて、通算 GPA の間に差は見られなかった (2.52 ± 0.58 及び 2.43 ± 0.55)。当然、DP を読む学生は、各カリキュラムが目的とする資質・能力を多く身につけるわけではない。しかし、真面目に DP を読み、意識している学生は、各講義に対する取り組みや、自己肯定感などに差があるのかもしれない。今後、講義への出席状況や性格特性などの調査を加え、より詳細な分析が必要だと思われる。

表 3 初年次アンケート結果と GPA の関係

設問	受験準備の段階で、現在在籍している学科・課程は第何志望でしたか			
	第1志望 (n=281)	第2志望 (n=157)	第3志望 (n=103)	第4志望 (n=127)
1 年前期 GPA	2.57±0.59 ^a	2.66±0.60 ^{ab}	2.67±0.59 ^{ab}	2.78±0.48 ^b
通算 GPA	2.40±0.54 ^a	2.51±0.57 ^{ab}	2.50±0.54 ^{ab}	2.57±0.48 ^b

異符号間は、同時期 GPA に対して 1% 水準で有意差があることを示す。

表 4 2 年次アンケート結果と GPA の関係

設問	教員や学生との人間関係で問題を抱えている			
	あてはまる (n=19)	ある程度あてはまる (n=69)	あまりあてはまらない (n=155)	あてはまらない (n=191)
2 年前期 GPA	2.02±0.50 ^a	2.18±0.71 ^a	2.36±0.66 ^{ab}	2.45±0.60 ^b
通算 GPA	2.20±0.39	2.36±0.61	2.50±0.58	2.56±0.56

設問	学生生活を続けていく上で健康面に問題を抱えている			
	あてはまる (n=16)	ある程度あてはまる (n=64)	あまりあてはまらない (n=124)	あてはまらない (n=231)
2 年前期 GPA	1.86±0.38 ^a	2.18±0.69 ^{ab}	2.33±0.64 ^{bc}	2.45±0.63 ^c
通算 GPA	2.03±0.45 ^a	2.40±0.61 ^{ab}	2.48±0.50 ^b	2.56±0.57 ^b

異なる符号間は、同時期 GPA に対し 1% 水準で有意差があることを示す。



図3 基礎教育で身につけた資質・能力とディプロマ・ポリシーを読んだことがある／ないの関係

おわりに

今回、平成26年度に入学した学生（6年制課程を除く）について、卒業までに収集されたアンケートについて分析を行った。その結果、これまでの単純な単年度の集計だけでは見えてこなかった事象を発見できる可能性が示された。例えば、APを読んだことがあるか、ないかは、本学を積極的に選択したか否かを見ることができる一つの指標出る可能性が高い。推薦で入学している区分において、APを読んでいる割合が非常に高いため、当然の帰結とみることもできる。当然、APを入学前に読ませることにより積極的な選択をする学生が増えるわけではない。しかしながら、一つの重要な要素ではあるため、今後、高大接続を展開していく上で、APを意識させる取り組みを積極的に行うことは意味のあることだと思われる。

今回使用したアンケートは、入学時は83.6%の回答率であるが、2年次54.2%、最終年次27.3%と、学年が進行するにつれて極端に低下している。特に最終年次においては、学科によって80%を超えるものもある一方、回答率5%を切る学科もある。そのため、今回は経年的な分析や、学科・課程別の分析は行わなかった。今回の分析で、アンケート調査から見える事象は多岐にわたる可能性が示唆されたため、今後の回答率の向上により、より一層の教育改善に資する有用な分析が可能になるとと思われる。また、アンケート結

果から早期に教職員の介入が必要な学生を見分けるなど、Early-alert Systemの構築の一助にもなると思われる。3ポリシーに則った教育の実施においては、アンケート調査において収集した情報及び分析結果も、課題の検討、改善・向上へ活かされるように、教育の内部質保証のための具体的な手順に組み込まれ、より実効性のあるものとして活用していく必要がある。

文献

「大学評価ハンドブック」、大学基準協会。
「教育の内部質保証に関するガイドライン」（平成29年3月31日）、大学改革支援・学位授与機構、質保証システムの現状と将来像に関する研究会。

注

- 1) 平成28年3月31日公布、平成29年4月1日施行。
- 2) 学校教育法第109条第2項及び学校教育法施行令第40条。
- 3) 平成30年1月12日現在、文部科学省ウェブサイト。 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1299085.htm
- 4) Institutional Researchとは、大学の経営、学生支援、教育・研究の質の向上などのため、学内外のデータを収集・分析し、施策の立案・実行・検証を支援する広範な活動を指す。